

---

# 君とあなたと私の間がら

日向 銀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

君とあなたと私の間がら

### 【Zコード】

Z3786C

### 【作者名】

日向 銀

### 【あらすじ】

喧嘩ばかりの幼なじみ3人。高校2年になって、どんな事が起るのか。3人の友情は…？3人の恋の行方は…？淡い高2の物語。

## 第1話・喧嘩仲間

「ふあ～。」

眠い、眠い、眠い！

今日の夢は最悪。

あの2人と喧嘩してた夢。  
しかも殴り合いの。

なんでこんな夢見ちゃったんだろ…。

私には幼なじみが2人いる。

：前言撤回。

私には喧嘩友達が2人いる。  
いつも喧嘩する奴らが。

名前は仁。阿波来 仁。（あばらい じん）

それから風真 白。（ふうま はく）

家が両隣で、物心ついた時には常に2人と一緒だった。  
言わば、兄弟みたいな存在。

そして私の今の悩み。

もっと青春したい。

楽しい人生送りたい。

みんな言うの、

あんたは男っぽすぎない！

つて。

2人といふから、私は男みたいになってしまった。

私は女になりたいの！

そう……ただの女の子に。

「遅えぞ、バス！」

高2の4月、始業式。

仁が家の前で待っていた。

何で？…どうでも良いけど。

私が無視して横を通り過ぎると仁は舌打ちした。

「おい！聞いてんのか！？」

「つるさいな、聞いてるよー。」

「お前覚えてるか？今日は白の誕生日だぜ。」

3

あ。  
忘れてた……。

「覚えてるに決まってるでしょー。」

「……忘れるなんて最低な奴。」

ふうんだ。

私の誕生日をいつも忘れるあんたに言われたくない。  
私たちは学校に続く道をゆっくり歩いた。

「で、それがどうかしたの？」

「放課後、迷い丘に集合な。丘にも言つとけよー。」

迷い丘つてのいうのは、

小さい時からの私たちの遊び場所で、夕日が綺麗な小高い丘。

迷子になる子どもが多から迷こ出す前がついたりしこ。

だから人も少ないの。

私は良ことだと思つた。

しばらく歩くと校門が見えてきた。

はあ  
…

今日の学校は憂鬱。

教室に行く前に体育館に行かなくちゃ。

クラス替えの張り紙が掲示されているはずだから。

「何ため息ついてんだよ？」

「ん~…？ クラスどうなるかなあって。」

はあ…。

みんな一緒にいいな。

ずっとみんなバラバラのクラスだつたし。

一度も全員そろつた事ないなんて、やっぱり寂しいから。

「またみんなバラバラだと嬉しいんだけどなー…」

「……なんで？」

「なんでって…。お前らと一緒になんてうぜえー…」

「最低！死ね！」

「ああ？？！てめえ…！なんなんだよー…」

何さ…人がせつかく、一緒になりたいって思ったのに。  
泣きたくなってきたな…。

「何騒いでんだよ…うつせえ奴ら。」

「あ…白ーおはよ。」

「おはよ…狛。」

言い忘れてたけど、私は狛！

竹馬 狛。（ちくば こま）

「白もバラバラが良い？」

「……どうでも良いだろ。

ただ、仁とは離れたい。」

「私もお～」

「お前らなあ！！！」

なんとか言つてゐるうちに体育館についちゃつた。

目の前に広がるクラス発表。

思わず目をそらした。

見たくないなあ…。

「「あ。」」

な、何。

なんで2人して声あげるの？

「おい、狛。見てみろよ。」

「残念…。仁と一緒にだなんて。」

え…？

私は目を上げた。

冷や汗が頬を伝つた。

「あ……あッ！……！」

私が見たのは、2年5組のところにあった、3人の名。

みんな同じクラスだつた。

「うげー！」

「最悪。」

「何でよー喜びなさい。」

仁、白に続き、私が言つ。

これから始まる、

新しい暮らしに胸を弾ませながら。

……ちよつと待て。

私喜んでいいの？

青春が  
……！

## 第2話・青い空の下

空が青い。

私の心も蒼い。

「こ～まツ！」

「ああ… 蔷ちゃん…。」

「どうした？」

この子は薔之谷 和湖。

(やぶのや わこ)

通称：薔ちゃん

「私と一緒にクラスで嬉しいんでしょお～？」

「薔ちゃんと同じクラスは嬉しいよ。よろしくね。」

私はこり笑つてみせた。

薔ちゃんは中学1年の時

引っ越ししてきた。

その時からの大親友で

本当に気が合つ良い子だ。

「ずるうい！私はあ～？」

「嬉しいに決まってる。」

「えへへ～」

この子は橘 穂波

たちばな ほなみ

通称：ほな

おつとりした性格で

高校に入つてからの友達なんだ。

みんなでワイワイ盛り上がり上がつてたら、  
何か悩んでるのバカバカしくなつてきた！  
良かったんだよね。

みんな同じクラスになれたんだし。

せっかくの昼休みなんだし！

「狹！」  
「仁…。」

田の前に仁は立つてゐる。  
まさに仁王立ちで。  
私は弁当片手に立ち止まつた。

「何？」

「お前に迷い丘の事伝えたのか？」

「……まだー。」

「早く伝えろよ、ノロマ。」

……は？

「こいつ今ノロマリって言つた？」

ふ～ん…。

「自分で伝えればいいでしょーがー！このバーカーー！」

「ああ？…喧嘩つってんのか？！」

「何よー！」

私は數ちゃんとほなを引き連れて教室を後退した。

仁は「つもつむかこんだからー」

ふだんは弁当を屋上で食べるんだけど  
今日は気分的に中庭で食べることにした。  
私たちは芝生の上に腰かけた。

「いいわよね～。あのかつこいい阿波来君と仲良いなんてー！」

かつこいい…？

ふいに數ちゃんが目を輝かせて言つた。

「そりだよね～！モテモテだしねえ～」

「ほなまで…。ビーチがカツコヒーのー、つるむかこ奴。」

「そおー？」

「そつー！」は昔から騒がしい奴！一直線で、一生懸命で、周りが  
見えてないこともあるし…。」

つて、私何言つてるのよ！

あんな奴良いとこなんて  
無いんだつてば。

「幼なじみだもんねえ。ホント羨ましい限りですわー！ねえ～、ほな  
！」

「ねえ～！」

あ、そう……。

周りから見たら、私たちの関係は羨ましいのか。  
2人とも確かにモテてるしなあ。

悔しいけど。

うん。

ホント悔しいけど、かつこいい！

「それに風真君！－クールで優しくて、人気絶大！」

數ちゃんの目が再び輝いた。

クール…優しい…！？

あの腹黒い白が？

「數ちゃん、それは違うー！」

「何がよーあんな紳士みた事ないわ。

つて…、あれは風真君…？

と、一緒にいるのは

女あああ？？？！

え、白と女…？

うわあ。

あれはまきしへ、青春…

白が告白をやれてる。

良いなあーー青春だなあー！

あれ…。

女の子が走り去って…

え？

「白ッーもつたいない事を…！…」

私は思わず白の元にかけよった。

白は意味ありげにほほえんで、座った。

「どうかした？ 狐。」

「どうかした！」

「まあ座りなよ。」

「え？ あ、うん。」

私は白の横に腰掛けてうなだれた。

だいたいズルいんだよ？

私なんて告られたこと無いし……。

それなのにいつも2人はさー。

「ご用は何でしう？」

「あのや、何でふっちゃんの？」

「何で付き合わなきゃなんないの？」

「え？ だつて……憧れない？ 青春だなあツて思わない？」

「好きな人とだつたらね。狐は青春したいの？」

「したい！」

青春したい！

恋愛したい！

いっぽしの女になりたい！

「独……俺独のこと好きだよ。ずっと昔から……。」

え？

え、ええ！――！？

由今なんて……

「嘘ツ？――」「うう、嘘。よく気付いたね。青春味わえた？」

「せーべーっ！――死ね！――殴り殺してやるわ――。」

私は白に殴りかかった。

「ははは。『めん』『めん』――」

「許さん――と、言いたいところですが、思い出した。」

また忘れてた。

仁に今度ばかりは殴られるところだったよ。

「放課後迷い丘に集合ね。」

「ん。わかった。」

「じゃ、私友達待たせてるから――。」

「おひ。」

ああ感じる。

數ちゃんとほなの輝いた視線が。

「ただいま。」

「風真君なんて？」

「好きな人となら青春したいって。」

「と言うことは、好きな人いるのかしら？」

一ズキッ

好きな人いるの？

私には教えてくれないの？

仁も知ってるのかな。

私たちの仲は隠し事無しなのに。

「二つまツーチャイム鳴っちゃうよ。行こー。」

「う、うん。」

白の方をチラツと見てみた。

もう白はいなかつた。

なんだか今日は悩み事がが多い日だわ。

放課後も嫌な事が起ころうな

予感がするんだ。

第2話 完。

### 第3話・タロの日

チャイムが鳴った。

ついにきた放課後。

私たちは部活に入つてない。

私はソフト部が無かつたから。

白はめんどくさいから。

仁は手首を怪我して以来、部活をやめちゃった。

だから、みんな一緒に迷い出すに行くんだと思つてたの。

チャイムを聞くやいなや

仁は走つて教室を出て行つた。

白と私は田を見合させて首をかしげた。

「どうしたんだろ。」「

「ああ。俺たちも行くわ。狛、乗つてくれだろ?」

「うん！乗つてくー！」

白はいつも自転車で来る。  
めんどくせこんだつて。

「独あーー！」

「ほなっ・どりしたの？」

教室を出よつとしたら、  
掃除当番のほなが泣きそつになりながら駆け寄ってきた。

何事だれい。

「む、む、虫がーー！」

虫？

なんだ、たかが虫か..。

「どーー？」

私はほなが指をした方に出向き

軽く1撃で虫を殺した。

「はーー・もつ大丈夫だよ。」

「さすが独あーかつーいいーー！」

「…ありがとう。じゃあね。」

……かつこーい、か。

喜ぶべきだとしかな？

「はい、行くわ。」

「うふ。」

自転車の荷台にまたがつて  
気持ちいい風を感じながら迷い丘を手指す。

気付けば、もう空がオレンジ色になっていた。

「ねえー。」

「ん？」

「空、キレイだねー！」

「そうだな。」

「白、誕生日おめでと。」

「…ん。ありがと。」

迷い丘の頂上についた。  
仁の姿が見当たらない。

パンパンー！！！

「うわッ。ビックリした…！」

「仁、何やつてんの？」

「ひひ～」

仁が後ろからクラッカーをならし、振り向いたそこには…

パーティーの用意がされていた。

「白、誕生日おめでとうー！」

「じつゆつ風の吹き回しだ？仁が俺の誕生日を祝うなんて。

「おつかよつとな。」

「……？」

凄いッ！

仁が白をこんなに祝つてゐるのは、初めて見たー！

盛り上がりつて

盛り上がり

すっかり夜はふけた。

「お、お前ら。俺へのプレゼントは？」

「プレゼントか。何が欲しい？」

事前に用意してなかつた私は、今更ながら聞くこととした。

「やうだな～。」

「白、俺からのプレゼントは……、宣戦布告だ！」

「…………は？」

「俺は猪がすんげえ好きだ！……ためえには譲らねえ！」

「…………。

「またまたあー！、何言つてんの？ホント馬鹿なんだから。」

「そつか、なるほど。だからこんなに祝つたわけか。」

「え？？？」

何納得してんの？

「俺だつて、狛が好きだ。嘘じやないぜ、狛。」

「な、何言つて…」

白まで馬鹿な事言つて！

2人ともどうしたつて言つの？

「やつぱりな。白、お前とは敵だ。大嫌いだ。」

「仁、お前の事は元々嫌いだつた。」

「うつせえー…でも、今日は譲つてやる。お前が狛を送れ。」

「当たり前だろ。」

私はおずおずと荷台にまたがつた。

なだらかな傾斜をゆづくり下る。

「本氣だから。」

白が静かに言つた。

「…………。」

嘘だよつて言つてほしい。

「『』めんな。今の関係でいたかつたんだる？」

「……。」

「だから俺たちが、今まで我慢してた。」

「…………え？」

「俺も「いや、好きになつたのは猶だけだよ。」

「…………。」

「「めんな。」

それ以外、白は喋らなかつた。

家の前に立つて、背中じやなくて白の顔を見た。

なんだか白じやないみたい。。

「ありがと。」

「ねい。おひくつ、考へな。」

「……うん。ありがとう。」

「じゃあなー。」

白と別れて家の中に入った。

そしてベットに崩れるように倒れた。

「も白も……私が好き?」

私は2人のこと……

好きだけど

この好きは、幼なじみとして……? ？

よくわからない。

わからないよ……。

第3話 完

## 第4話・朝日と共に

眠れない。

頭上の時計に手をつついて、時刻を確認した。

明け方の4：30だ。

私はびっくりしていいの……？

好きだよ。

好きだけど……。

愛してる？

……………えりかを……？

本当に……？

頭を抱えていると、部屋の窓から「コシッ」と音が鳴った。

……………？

狛は窓を開けた。

空は白くなりだして いた。

もう朝かあ。

三九

را چی!

こまッ！！！

「  
？」

「「狹ツ！！」

「えッ！？…仁ッ、白ッ！何してんの？」

「シーツ！」

あ、今はまだ4・30だった。

「おつておこでよー。」

「う、うさ。」

狹は音を立てなつよつて、そつと獣を出した。

「狹、おはよー。」

「おはよ、白。何してゐの?」

「狹の事だから、頭抱えて、寝れないんじやないかと思つて。」

さすが幼なじみ…。

まさこにその通りだよ。

狹ははにかんだ。

「だから俺たちが、わざわざ様子見に来てやつたんだ。」

「わざわざつて…隣の家だし、それに「たちのせいだからー。」

そつだよー。

これも全てこいつら2人のせいだ！

なんかイライラしてきたッ！…！

「んでも、今から」

「殴りせり…」

「は？」

「お前ら殴つてやるー。」

バキッ

え…？

「いってえ～」

「何殴られてんの？」

いつもは避けるへせ。」

狛は頬をさする2人を見て、キヨトンとした。

「狛…グーは酷いんじゃない？」

「だつて…何でよけないのよ…」

「今日は殴られよつと思つて來たからね。」

……………え？

白…？

「うごく発言…？」

頭おかしく . . . .

「なつてねえよー。」

「仁、心を読むな！」

「いや、顔に書いてあるから。」

狛は顔を手で覆った。

「とりあえず…迷い丘行こつか。」

「おい狛、後ろ乗れ。」

「その前に、はい、これ着て。春でも、さすがに朝は寒いよ。」

「あ、うん。ありがと…。」

空もだいぶ明るくなつて、時刻は5：00。

狛は白の上着を羽織り、仁の自転車の後ろに乗った。

迷い丘につくまで

3人とも言葉を発しなかった。

「…ついたぞ。」

仁が自転車を止めた。

「ねえ…覚えてる?

前にも3人でこんなに朝早く、ここに来たよね。」

「確か…小学校4年の時だつたつけ。」

白がにつこう笑った。

「んな事あつたか…?」

「仁の記憶力は小学生以下だな。」

「なんだと?!白、てめえ…」

「私、あん時は2人とも嫌いだつた。」

「…………え? ??」

「だって、喧嘩ばつかうつてくるし。」

「「そ、それは…。」

2人は好きな子には素直になれなくて、イジメてしまつタイプの子供だった。

狹にとつては、最低な奴らといつ認識だつたが。

「でもね、2人といふ時は心地良いの。  
嫌いだつた時もね。

だから……

どつちかを選べない。

私卑怯者だから

2人とも愛してるもん！」

「ごめんね、と付け加えて狛は俯いた。  
2人が離れていくなんて  
想像もしたくない！

「狛、顔をあげなよ。」

「そうだ！この俺様がそんな事で諦めると思つか？」

「どつちも愛されてるなら、まだ望みはある。俺も諦めないよ。」

2人とも……！

狛は顔をあげた。

「ありがとう……ッ！」

2人は狛の頭をわしゃわしゃと撫でた。

「うーっし、帰るか！」

「じゃ泊、俺の後ろに乗りな。」

「おーーー今日は俺に譲るつてやれ……。」

「うん。だからさつき譲つただろ?」

「なッ…てめえ…ッ」

「ふ…あははははー

馬鹿じゃないの?」

「うわせえー

「私、歩くー久しぶりに。」

「それじゃ、お供しますか。」

「うんー。」

3人の影が太陽に照らされ長くのびる。

いつして明日も来年も

願わくば、

これからずっと

一緒にいられますように。

君とあなたと私の間がら

元。

## 第4話・朝日と共に（後書き）

初小説という事で

ぐだぐだ感がありますが。

この話はただたんに  
恋より友情  
と聞いたかつただけ。

そのつち、番外編を書いひとつと思します！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3786c/>

---

君とあなたと私の間がら

2010年12月11日03時13分発行